

語彙研究文献語別目録凡例

- (1) この目録は、個々の語について、それぞれのどのような研究文献があるかを語別に検索するためのものである。
- (2) 採録文献は、語形・語義のほか、文法上の用法、表記・読み方等に関するものも含めた。ただし、個々の助詞・助動詞等について詳述していても文法専門書は採録していないので、それらの語については、ここに掲載した文献のほか、例えば佐藤喜代治編『国語学研究事典』(昭52・11明治書院)の参考文献の欄を参照されたい。
- (3) 文献採録にあたっては、原則として明治以降昭和五十七年までに刊行された単行本・雑誌・紀要・講座・全集・論文集の類の中から該当するものを選んだ。なお、本講座所収の論文は十一巻まですべて採録した。
- (4) その語が、単行本・論文の題名に表示されているもののほか、単行本・論文中にその語についての研究が記述されているものも適宜採録した。ただし、その語に関する記述のある章名・ページ数などの記載は紙数の関係で割愛せざるを得なかった。なお、編集委員等の読んだ文献には限りがあるため、本巻採録文献で十分とは言えず、このほかにも有用な文献が多数あるかと思われる。
- (5) 見出しの表記は、現代語・古語・方言とも原則として現代仮名遣いとし、五十音順に排列して、適宜、歴史的仮名遣い・漢字表記・品詞等を示した。語源不明の方言は発音のままひらがなで表記した。
- (6) 難読語については、漢字音で五十音順の位置に空見出しを立て、↓印でその読み方(本巻における文献記載箇所)を示したものもある。
- (7) 題名として表示してある語形のほか、必要に応じて、その語の意味を示す現代標準語形を見出しとしたものもある。
- (8) 同義語・類義語・同語源語等で参照すべきものを、↓印で示した場合がある。ただ

し、見出し語の漢字表記や論文題名で関連語がわかる場合はその指示を省略した。

(9) 見出し語の立て方や分類は、必ずしも文法論的・語彙論的に一貫した理論にもとづいているとはかぎらず、文献検索の便宜を第一としている。

(10) 派生語・複合語等は原則として小見出しとし、親見出しと共通の部分は―印で示した。なお、同一の文献が親見出しと小見出しに存在する場合、小見出しには執筆者名と刊行年月のみを示した。

(11) 個々の文献の表示は次のとおりである。

【単行本の場合】

○著者・編者氏名『書名』（発行年月・発行所名）

【論文等の場合】

○執筆者氏名「論文名」（『掲載誌等の名称』巻号・発行年月）または（『所収書名・巻数』発行年月・発行所名）

ただし、本講座所収の論文にかぎり、執筆者氏名と巻数のみを表示する。

【例】○田島毓堂「あいさつ（挨拶）」（佐藤喜代治編『講座日本語の語彙 9』（昭58・1明治書院）〓〓田島毓堂⑨

なお、本巻では表記を簡明にするために、書名・論文等の題名にそれぞれ独特に使用されていた記号や記述形式を変更した場合がある（例えば「」を「へ」にした等）。

また、同様の趣旨から雑誌名・講座名・全集名及び発行所名を略記した場合がある。